

「試合に出るチャンスは誰にでもある。自分で勝ち取れ」。2010年、中央大学ラグビー部の監督に就任した松田雄(40)の方針は明快だった。部員数が少ないこともあり、レギュラーがほぼ固定していた現状をまずはぶち壊した。リコでの通常勤務をこなしながら毎週水、金に訪れるグラウンドでは必ず試合形式の練習を導入、選手はとことん肉体を削り合った。中央大が失っていた競争意識を徹底的に植え付けた。

就任1年目、中央大は3年ぶりに大学選手権に出場。選手の個性と正面から向き合い、常に腹をくくっている「親分肌」の松田の真摯な思いはチームに伝わっていた。「試合中、迷ったら俺の顔を見ろ。すべて大人の自分が責任を取る」。1回戦で強豪・明治大学に敗れるも、光は見えた。

名将にみる マネジメント術

中央大学ラグビー部

松田 雄監督



グラウンドでは必ず試合形式の練習を行い、競争意識を植え付けた

選手と向き合い腹くくる

古豪復活へー。松田体どこかにスキがあった。制は早くも軌道に乗ったか。東海大学戦でチームの要、宇野将史(23)がラックの下敷きで大けがを負い、今も懸命のリハビリに取り組み、2部の山梨学院大学との入れ替え戦に臨む屈辱を味わった。フォワードの経験者も残り、飛躍が期待されたこの年。「今思えば、

3年目もどごとく接戦を落とす試練が続いた。リテ。「よし分かった。おまの決意は揺るがなかった。1ク戦の最終戦。拓殖大学に勝てば3位で大学選手権出場、負ければ6位に沈む。「天と地」を分ける大一番も1トライ差で散った。「明確なチームのターゲットを絞ってあげられなかった。勝負の世界は甘くない」。人生をスタートしたいと考

えていた最中「山北たち」とい思い出された。「ス作りたい。その一点だけが、選手たちが、選手たちを去り、選手と向き合う時間ができた。そして、選手たちに勝つ喜びを味わわせるために「この人の力を借りたい」。今の学生に足らない、自分にもいものを持っていくリコー時代の先輩、ライバル・大東文化大に迎えた。2人の奏でるハーモニーで中央大ラグビー部は一気に上昇曲線を描くことになる。

松田は痛感し、勝利の女神はなかなか微笑(ほほえ)んでくれなかった。どうすれば勝てるのか。自分には何が足りないのか。悩む松田の心を知ってか知らずか、4年目のシーズンが始まる昨年1月、今季、チームの主将を務めた山北純嗣(22)ら3、4人彦(57)だった。

「よく人生を考えろ。一週間後にもう一度、話を聞かせろ」。佐藤の温かい言葉に感激した松田だが、そ

|| 敬称略
(阿部将樹)